

シリーズ《本格ミステリ入門（海外編）》

執筆 大村 拓

第5回 その他 黄金期の作家たち

～クロフツ バークリー ヴァン・ダイン セイヤーズ～

いよいよ最終回となった今回は、三大ミステリ作家（クリスティー、クイーン、カー）以外でその後のミステリの発展に多大な影響を与えた4人の作家を紹介してみたい。

1. リアリズム・ミステリの創始者—F. W. クロフツ
 2. 本格ミステリの革命児—アントニイ・バークリー
 3. 「犯人当て」スタイルの創始者—ヴァン・ダイン
 4. 文学性重視のもう一人の「ミステリの女王」—ドロシー・L・セイヤーズ
- それでは、4人それぞれの代表作を見ながら、本格ミステリ入門（海外編）を締めくくろう。

F. W. クロフツ



ヴァン・ダイン



アントニイ・バークリー



ドロシー・L・セイヤーズ

1. F. W. （フリーマン・ウィルス・）クロフツ（1879-1957, イギリス）

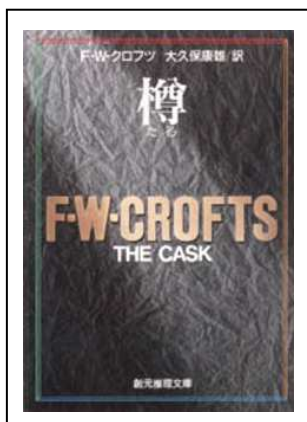
クリスティーが『スタイルズ荘の怪事件』で黄金期の開幕を華々しく告げたのと同じ年、もう一人の重要作家がデビューした。それがこのクロフツである。彼の作風はそれまでのものとは大きく違って、通常「リアリズム・ミステリ」とか「現実派」とよばれるものである。リアリズム・ミステリの特徴は、作品に現実感を取り入れることで、主に舞台・動機・捜査法の3点を現実化させることであつた。中でも最大の特徴は、捜査法（探偵法）を一新させたことである。従来のミステリでは、いつも真相に正しく導くのは超人的な推理能力をもった私立探偵であり、警察は見当外れの方ばかりを追いかける愚かな存在というのが相場であつた。しかし実際には、民間人がこんなに活躍することなどありえないし、実際の警察はもっと賢明なはずである。そこでクロフツは警察官を探偵役に起用し、彼を天才的な推理力をもっているわけではないが、かといって決して愚かではないという存在にしたのである。おおよそ読者の平均的な知性よりやや上をいくという程度だろうか。その捜査方法も読者を煙に巻くような奇抜なものではなく、事実に

根ざして仮説を立て、それを一つひとつ検証していくという地味で堅実なやり方である。この仮説は検証の結果誤りであることが判明する場合もしばしばで、その場合はもう一度仮説を立て直し、そこからやり直すのである。そしてその推理の過程は常に読者にも同時進行的に提示され、読者も一緒に推理に参加することができるようにしてある。そのため読者が正しく推理できるように、作者は常にかゆいところに手が届くがごとくに問題点をわかりやすく整理してくれるのである。この整理の上手さこそがこの作家の最大の美点といってもよいだろう。したがって読者は探偵よりも一歩先んじて真相を見破ることも不可能ではなく、天才探偵の華麗な推理を、結末でおいしくしかなかった従来のミステリとはまったく違ったスタイルをとっているのである。

ただリアリズムといってもただ一つリアルでない点があることには注意しておかなければならない。それは犯人の犯行計画である。クロフツの犯人は、アリバイ・トリックを始めとして捜査陣を誤らせるためにあらゆる策を弄し、複雑で緻密な犯行計画を実行していく。しかしよく考えてみれば、こんな犯罪者は現実にはほとんどおるまい。むしろこんなに策を弄すれば、かえって手がかりを残して発覚する確率は高くなってしまいうだろう。ただしこのようにないかにも作り物めいた犯行計画の非現実こそ、本格ミステリとしての面白さがあるということは、理解しておいてほしい。

このようなクロフツの作風はその後、刑事の人間ドラマや警察組織間のあつれきなどをテーマにした「警察小説」や、主に社会問題の告発を主眼とした「社会派推理」といった他ジャンルを生み出していくことになる。さらには現在隆盛を極めているテレビの刑事ドラマの原点もここにあるといつてよいであろう。かくも多大な影響力を後世のミステリ界に与えたのがこのクロフツなのである。

◎『樽』（1920年）（933㌥ 東京創元社）



【内容】 ロンドンの波止場に揚げられたワイン樽からのぞいていたのは、金貨と人間の手だった！ 事件の予感に荷揚げ作業員が右往左往するなか、樽は忽然と消え失せる。通報を受けたロンドン警視庁のバーンリー警部は樽の行方を追うが、それは英仏海峡を横断する大がかりなアリバイ捜査の発端にすぎなかった…。ミステリ史上に燦然と輝き、江戸川乱歩をして瞠目せしめた傑作本格。

リアリズム・ミステリの誕生を告げるクロフツの記念すべきデビュー作である。冒頭は、ロンドンの波止場で船荷の樽の中から死体と金貨が発見されるという少々派手な演出で始まるが、その後は英仏両国の探偵が樽の動きを追って一歩ずつ丹念に真相に迫っていくという、

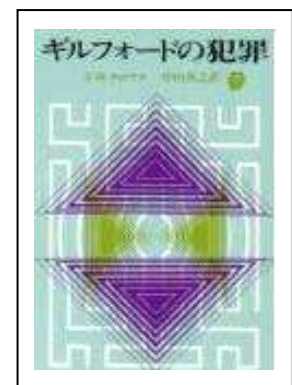
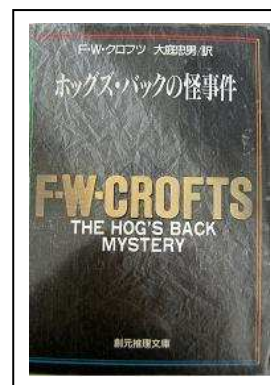
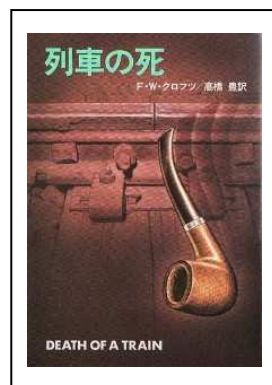
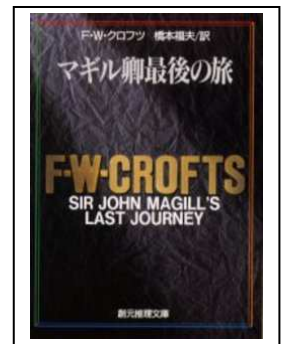
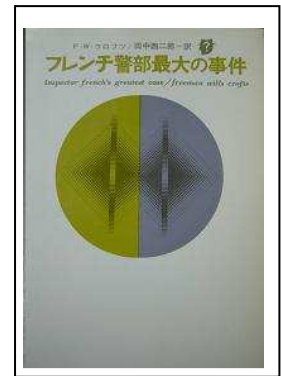
ひたすら地味で堅実第一のクロフツ節が展開される。その過程で複数の樽を駆使して巧妙な犯行を行った犯人の犯行計画が徐々に浮かび上がってきて、後半はその犯人のアリバイ崩しが展開されるのである。アリバイとは、犯行時刻に現場にいなかった確固たる証明のことを指すのだが、一見アリバイを持っているようにみえる容疑者のトリックを暴き、そのアリバイが偽装であったことを見破ることを「アリバイ崩し」という。実はこのアリバイ崩しこそがクロフツが最も得意とするお家芸なのである。ただしアリバイを崩すためには容疑者が限定されていなければならないため、犯人の意外性がなくなってしまうのが、このタイプの最大の難点である。本作でも真犯人の正体は中盤ですでに判明してしまう。つまり従来のミステリの最大の読ませどころである犯人探し（これを「フーダニット」とよぶ）の興味を放棄してしまっているのだが、このようなリスクを冒してでもアリバイ崩しに専念しようとするクロフツの覚悟が、いさぎよくて頼もしい。以上のようにまったく派手さがない本作なので、若い読者にはいささか刺激が足りないかもしれない。しかし年齢を重ねてくるとこの地味さがたまらなく心地良くなってくる。まさに熟成したワインのように名作の香気が漂ってくるのである。これぞ大人の読書といえよう。

さて本作で唯一残念な点は、クロフツの代表的な名探偵であるジョーゼフ・フレンチ警部が登

場しないことだ。クロフツは当初1作ごとに違った探偵を起用していたが、第5作以降は一貫してフレンチ警部が登場するようになる。クロフツの探偵たちはフレンチ警部に限らずすべて非天才型で大差のないものではあるのだが、やはり続けて読んでいくことで、フレンチ警部に愛着がわいてくる。フレンチ警部は極めて温厚なロンドン警視庁（別名スコットランド・ヤード）所属の警察官である。人並みに出世欲もあるし、困難に直面すればくじけそうにもなるごく普通の常識人だ。またどんなに捜査が忙しくても日曜日はちゃんと休む良き家庭人でもある。自分の能力を過信することなく、ひたすら堅実に捜査を進めていく粘り強さが身上だ。そして彼の最

大の長所はそのコミュニケーション能力の高さであろう。上司や部下あるいは地方警察とも常に円満な関係を築き、聞き込み調査においても、相手を安心させて自在に情報を聞き出す能力を有しているのである。加えてその粘り強さや創意工夫、高い使命感はまさに社会人の理想であり、これから就職戦線に挑むことになる高校生諸君には、是非ともお手本にしてもらいたい人物である。

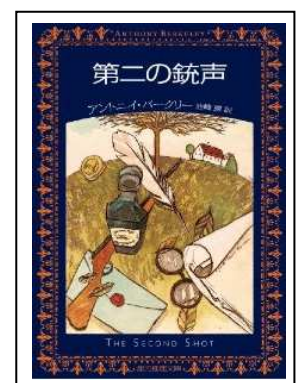
フレンチ警部の活躍を楽しむには、その初登場作であり、ヨーロッパ中をまたにかけたスケールの大きな展開が魅力の◎『フレンチ警部最大の事件』（★933 ク 東京創元社）、オーソドックスなアリバイ崩しが楽しめる◎『マギル卿最後の旅』（★933 ク 東京創元社）、倒叙物の名作と名高い◎『クロイドン発12時30分』（★933 ク 東京創元社）、列車転覆に関わるドイツ軍スパイの陰謀をフレンチが潜伏調査する異色作◎『列車の死』あたりが代表的なところであるが、基本的にクロフツ作品は『樽』を除けばほとんど優劣の差はない。個人的には、クロフツとしては珍しくフェア・プレイを前面に押し立てた◎『ホッグズ・バックの怪事件』（★933 ク 東京創元社）や、不可能状況のもとでの金庫からの宝石盗難事件を扱った◎『ギルフォードの犯罪』（★933 ク 東京創元社）あたりがお勧めである。



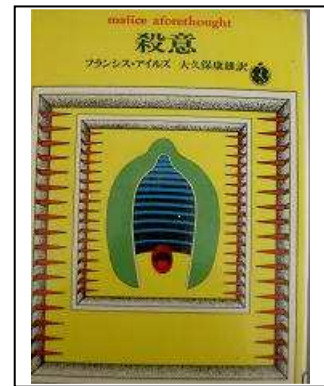
2. アントニー・パークリー (1893-1971、イギリス)

(別名義：フランシス・アイルズ、別名義：A. B. コックス)

パークリーは、型にはまったミステリの様式を革新することに尽力したミステリの革命児である。彼の目指すところは、長編◎『第二の銃声』（★933 バ 東京創元社）の序文に明示されているが、その趣旨を要約すると、ミステリの興味は、数学的なものでなく心理的なものであるべきで、そのため謎解きの中心は人間性の謎であるべきだ、といったものである。この主張は当の『第二の銃声』では、非体育会系的主人公のいかにも内気でうじうじした性格描写の巧みに反映されているが、この作品は同時に巧緻な構成・大胆なトリック・結末の意外性といったミス



テリ本来の面白さも十分に兼ね備えた傑作なので、バークリーの主張を十全に理解するには最適の本ではないかもしれない。それならばむしろフランス・アイルズという別名義で書かれた3部作にそのねらいがよく表れている。特にその第1作◎『殺意』（★933 ア 東京創元社）は犯人の心理の動きを克明に描いた犯罪心理小説の傑作で、彼の目指した心理重視という方向性がここに結実しているといつて過言ではなからう。そしてこの作品はこの後、謎解きよりも犯罪に関わる心理描写を主眼とする「サスペンス」という別ジャンルを生み出していくことになるのだが、本稿はあくまでも本格ミステリを語る場なので、あまり深入りしないでおこう。



バークリーの革新したのはそれだけではない。従来の型にはまったありきたりの名探偵像をうち破って、前例のない型破りな探偵の性格を創出している。バークリーの生み出したシリーズ探偵は、ロジャー・シェリングムという素人探偵であるが、彼はもはや名探偵とよんでよいのか微妙な人物である。お金持ちで趣味で犯罪捜査にあたるシェリングムはまさに名探偵の典型なのだが、彼が行う天才的推理は真相を見抜くこともあれば、しばしば的はずしもするといった微妙なものなのだ。このようにミスを行えば自信をなくしておとなしくなるのが当たり前だが、シェリングムは一切気にかけることもなく元気に名探偵業にまい進していく。自分勝手な思いから捜査に関わり、関係者を振り回していくシェリングムの暴走ぶりは、ありがた迷惑以外の何ものでもないのである。そんなシェリングムの暴走ぶりが極点に達するのが、◎『最上階の殺人』（★933 バア 新樹社）という作品である。被害者の姪を勝手に秘書にして捜査にあたるシェリングムだが、彼女への態度はもはやストーカーの域にあるといつてもよく、どんなに相手から嫌われようと意に介さずに突っ走る。また推理も理にかなったさすがと思わせるものなのだが、結果としては間違っている。この姿は、都合良く真相を見抜くだけだった従来の名探偵に対する作者の痛烈な批判精神の産物なのだ。



このように型破りのところが魅力の作家なので、本格ミステリの本来の型についてある程度理解していないと、その真価は理解しがたいところがある。その意味ではミステリ初級者向きの人ではないともいえるが、一方、元々はユーモア小説の書き手として鳴らした人なので、そんなに難しいことを考えなくとも、読んでいて素直に楽しい小説であることも間違いはない。

◎『毒入りチョコレート事件』（1929年）（★933 バ 東京創元社）



【内容】 ロジャー・シェリングムが創設した「犯罪研究会」の面々は、迷宮入り寸前の難事件に挑むことになった。被害者は、毒が仕込まれた、新製品という触れ込みのチョコレートを試食した夫妻。夫は一命を取り留めたが、夫人は死亡する。だが、チョコレートは夫妻ではなく他人へ送られたものだった。事件の真相やいかに？会員たちは独自に調査を重ね、各自の推理を披露していく。

本作は「多重解決」ものの代表作として、後の作家たちに絶大な影響を与えた作品である。「多重解決」とは、一つの事件に対して何通りもの解決が並立的に出てくる作品のことで、推理の仕方の違いで一つの問題から全然違った答えが出てくること自体を楽しむ趣向である。名探偵が解き明かす唯一無二の解決を楽しむ通常の作品とは、対極をなすものといえる。本作では、シェリングムが集めてきた6人の探偵たちが、郵送された毒入りチョコレートを食べて死亡した殺人事件について、解決案を披露しあう物語である。それぞれの解決には皆独自の魅力

があり、読者はそれぞれを楽しむことができる。そしてなんとシリーズ探偵シェリングラムが自信満々に披露する解決も真相ではなく、さらに別の解決によって否定されてしまうのである。これぞ「迷探偵」シェリングラムの面目躍如である。一応最後に提示された解決が真相で、残りは間違いということにはなっているが、その説得力においては6つの解決の間に特に優劣の差はなく、読者はどれを信じてもかまわないようになっている。いかにも革命児バークリーらしい斬新な趣向で、これも名探偵の絶対性を否定する強烈な批判精神の表れなのである。また本来深刻な殺人事件を単なるゲームとして面白がりながら推理合戦に興じる探偵たちは、ある意味不謹慎の極みなのだが、このようにミステリを現実と切り離してゲーム化しようとする方向性も、現代日本の本格ミステリ作家たちに、大きな影響を与えている。



なおこの多重解決の趣向は、バークリーが先駆者というわけではなく、実はこれより先にイギリスのロナルド・A・ノックスという人が、◎『陸橋殺人事件』(★933 / 東京創元社)という作品で同様の趣向を試みている。このノックスという人もバークリーに負けず劣らずの曲者なので、バークリーになにがしかの影響を与えたのではないだろうか。そしてこの作品をより先鋭化させたのが本作であるといっていよいだろう。

◎『試行錯誤』（『トライアル&エラー』）(1937年)（★933バ 東京創元社）



【内容】 主治医から余命数か月と宣告されたトッドハンター氏は、命尽きるまでの短い時間の有意義な使い方を考えた結果、世に害をなす人物の抹殺に充てることにした。迷走の末ようやく標的を決定したものの、その死にまつわる過ちから裁判のため奔走する羽目に。おちおち死ぬこともできないトッドハンター氏を待ち受ける皮肉な運命とは。多重どんでん返しで読者を魅了するバークリーの到達点。

バークリーの曲者ぶりは、本作において極点までエスカレートする。犯人が罪のない別人に罪をなすりつけようとする話は数多くあれど、罪のない人に着せられそうになった罪をはらそうと、必死になって自分の有罪を証明しようとする話などバークリー以外の誰が考えつこうか。そもそもの発端からして、余命いくばくもないと宣告された主人公が、死ぬ前に人類に貢献できる最良のことは何かと有識者たちに相談した結果、世間に害悪をなす人間を殺すことが一番だという結論に達するという皮肉たっぷりのものだ。そして5部構成をとる本文は、それぞれ異なる5つの文体を書き分けながら展開する。その間は著者の技巧に感心したり、ユーモアを楽しんだりしながら読み進めていこう。そしていよいよ結末で、はたして主人公は望みどおり有罪判決を受けるのか、という興味が満たされるかと思いきや、とんでもないどんでん返しが待っているのである。いやはやバークリーという作家は誠に一筋縄ではいかない人だ。なお本作で主人公に協力して主人公の有罪を証明すべく尽力するアンブローズ・チタウィック氏とは、『毒入りチョコレート事件』において、最後の解決を任された人である。

ちなみに原題の Trial And Error とは、慣用句の「試行錯誤」という意味の他に、裁判 (Trial) と誤審 (Error) という意味をもっており、このどちらの意味も本作の主題にうまく沿ったものになっている。

3. (S. S.) ヴァン・ダイン (1888-1939、アメリカ)

ヴァン・ダインのミステリ界への最大の貢献は、ミステリを作者と読者との間の知的ゲームとするためのスタイルを創出した点にある。それまでのミステリは怪奇幻想作家のポーが生みの親だったことから、英米の怪奇小説（イギリスの場合は特に「ゴシック小説」とよぶ）の伝統を背景に発展してきた。しかしヴァン・ダインは怪奇小説特有の怪しげで謎めいた雰囲気は unnecessaryなものだと切り捨て、ミステリとはただ単に作者と読者が知的競技を競い合うためのテキストであればよいと、そのスタイルを先鋭化させたのである。これは言い換えれば、ミステリの興味の中心は「犯人は誰かを当てること（フーダニット）」のみにあり、それ以外の要素は一切不要という姿勢なのである。さらにはミステリの根幹とさえいえるトリック（犯人が仕掛けるごまかし）すらも重視しない、という徹底した立場をとるようになった。これによりミステリは、一般の文学とはまったく違った独自の存在となったのである。このようにヴァン・ダインはミステリの発展のために欠かせない貢献をした人であるのだが、残念なことに現在ではその輝きを失っている。その理由は、トリックよりもロジック（犯人を特定するための論理）重視の作風を打ち出しながら、その肝心のロジックにまったく生彩がない点につきる。これは彼の影響を受けて登場した後輩作家のエラリー・クイーンが同じスタイルをとりながら、ロジックの美しさで今なお読者を魅了しているのと対照的である。

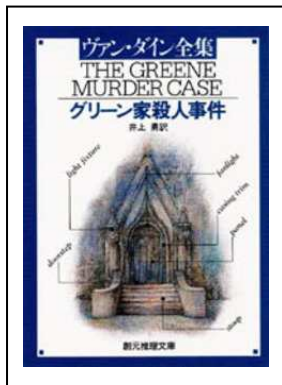
ヴァン・ダインとクイーンの違い

それではこの両者の違いをもう少し詳しく見ていきたい。ヴァン・ダインは、犯人を推理する材料として、動機や機会のみならず物的証拠までも不適當なものとみなしてしまった。物的証拠は犯人がわざとごまかして残しておくことができるものなので、それを土台に推理を進めると誤る可能性があると考えたせいだ。そこでヴァン・ダインは唯一信頼できる手がかりは、心理的特性だけだと考えてしまった。つまり画家の描いた絵や作曲家が作った曲にはそれぞれ、知らず知らずのうちに作者の個性が反映されているように、犯罪もその犯人の心理的特性が表れているというのだ。たとえば、ある犯罪の性質を「大胆で冷酷」なものだと分析できたならば、容疑者の中から「大胆で冷酷」な性格の人物を見つけ出せば、その人物が犯人だというものである。しかしこんなあいまいな推理などとうてい納得できるものではない。そもそも「大胆で冷酷」な犯罪という断定自体があいまいなものだし、人間の性格は複雑なものなのだから、誰が本当に「大胆で冷酷」な人物かなんて、客観的に証明できるはずもなかろう。このように弱い根拠を立脚点としてしまったことから、彼の作品の種明かしを聞いてもいつも消化不良のようになって、少しもすっきりしないのだ。

一方、クイーンは、その推理の材料をヴァン・ダインがしりぞけた物的証拠に頼ろうとした。物的証拠には犯人が隠そうとしても隠しきれない様々な事実の痕跡が残されているのだから、これらの物的証拠を論理的に吟味していけば唯一無二の犯人に行き着くことができるという考え方だ。実際クイーンは物的証拠を手がかりに読者が思いもよらなかった筋道を見つけ出し、そのエレガントな推理で読者を酔わせてくれるのだ。両者の推理方法のどちらが優れているかは一目瞭然で、一度クイーンのエレガントな推理を知ってしまうと、ヴァン・ダインの心理分析的推理など、まったくあてにならない子どもだましのものに見えてしまう。以上のように、物的証拠をクイーンのように取り扱う方法に思い至らなかった点が、ヴァン・ダインの限界といえるのだ。

以上の点から、ヴァン・ダイン作品を現代の視点から評価すると、いささか厳しいものになってしまう。もはや一般的な読者にお勧めできるような作家ではないともいえるが、一方彼の二大傑作と言われている以下の作品は、ヴァン・ダイン固有の欠点は持ってはいるが、本来のヴァン・ダインのねらいと違った点に思わぬ魅力があり、そこが高く評価されているようである。

◎『グリーン家殺人事件』（1928年）（★933 ヴ 東京創元社）

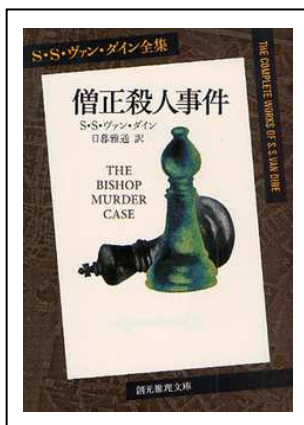


【内容】 ニューヨークのど真ん中にとり残された前世紀の古邸グリーン家で、二人の娘が射たれるという惨劇がもちあがった。この事件を皮切りに、一家の皆殺しを企てる姿なき殺人者が跳梁する。神のごときファイロ・ヴァンス探偵にも、さすがに焦慮の色が加わった。1ダースにのぼる著者の作品中でも、一、二を争うといわれる超A級の名作。

互いに憎しみ合う一族の中で起こる連続殺人。そのドロドロした陰湿な雰囲気と緊張感あふれるサスペンスが、後世の作家に大きな影響を与えている。『Yの悲劇』（クイーン）を始めとする海外作品のみならず、とりわけ戦前の日本ミステリに絶大な影響を与えた作品なのである。基本的にこのようなタイプの話は日本人の好みに合うらしく、わが国では

長らく名作として愛読されてきた。（一方で欧米での評価はまったく高くないという。）しかしこのような謎解きと関係ない「雰囲気」といった要素は、作者自身が極力排除しようとしたことなのだから、こういう点で評価されているとは皮肉なものである。実際、犯人当て（フーダニット）として見ると、本作はヴァン・ダイン特有の欠点が目についてくる。名探偵ファイロ・ヴァンスは偉そうにしているわりには、一向に連続殺人を止められず、おおかたの読者が真相に気付くころになってようやく自信満々に謎解きを行うのだから、何とも情けない話である。また解決部でヴァンスが示す推理の中に、「親が犯罪者ならその子にも犯罪者の資質が遺伝する」といった考え方があるが、これは現在の人権感覚からいって大いに問題のある危険な考え方であると指摘しておきたい。

◎『僧正殺人事件』（1929年）（★933 ヴ 東京創元社）

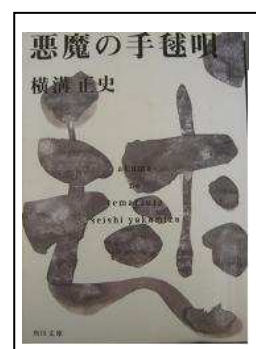


【内容】 4月のニューヨーク、マザー・グースの有名な一節を模した奇怪な連続殺人事件が勃発した。童謡に見立てた殺人を示唆する手紙を送りつけてくる“僧正”の正体とは？ 史上類を見ない陰惨で冷酷な連続殺人に、心理学的手法で挑むファイロ・ヴァンス。江戸川乱歩が称讃し、後世に多大な影響を与えた至高の一品。

だあれが殺したコック・ロビン？ 「それは私」とスズメが言ったー
「私の弓と矢でもって コック・ロビンを殺したの」

これはイギリスに古くから伝わるわらべ歌（これらをマザー・グースとよぶ）の一節なのだが、この歌のとおり殺人が起こり、続いて2番、3番の歌詞のとおり次々と殺人が行われていくのだ。子どもの素朴なわらべ歌と陰惨な殺人というミスマッチな2つを結びつけたことから、えも言われぬ不気味な雰囲気が立ち上がってくる。これが本作の最大の魅力である。この独創的な発想こそが、ヴァン・ダインが後世に残した影響力の中でも随一のものであろう。なおこのような趣向は「見立て殺人」とよばれ、本作に触発されて、『そして誰もいなくなった』（クリスティー）や『靴に棲む老婆』（クイーン）、◎『悪魔の手毬唄』（横溝正史）（★913 ヨ 角川書店）、○「意外な遺骸」（泡坂妻夫）（◎『亜愛一郎の転倒』（★913 ア 東京創元社）所収）などの数々の童謡見立て殺人物の傑作が生まれていくことになるのである。

これまでさんざん指摘してきたヴァン・ダイン特有の欠点は、本作でも基本的には変わりはないのだが、童謡見立て殺人という不気味な雰囲気と、結末で明かされる犯人のあまりに哲学的な特異な動機が強烈な印象を残すため、その欠点を補ってなおお釣りがくるくらいである。



※上記マザー・グースは「THE DEATH OF COCK ROBIN」 日暮雅道訳

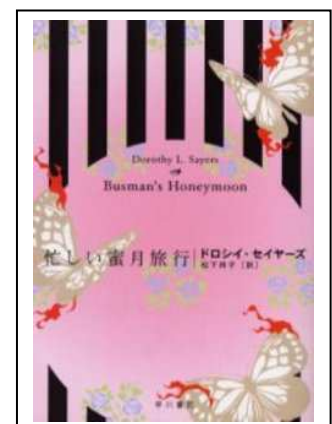
◎『オフ・オフ・マザー・グース』和田誠訳（★931ワ 筑摩書房）で、原文を読むことができる。

4. ドロシー・L・セイヤーズ (1893-1957、イギリス)

セイヤーズは英米では、クリスティーと並ぶ二大女流ミステリ作家として絶大な評価を得ている人である。一方、わが国での評価はクリスティーには遠く及ばず、それどころかしばらく前まではほとんどの著作が未訳か絶版という状態で、一部のマニアにしかその名を知られていない存在であった。近年になってようやく紹介も進み、一定の評価は得られるようになってはきたが、それでもクリスティーに肩を並べるレベルではない。この両地域での評価の差はいったいどこにあるのだろうか。それはひとえにセイヤーズの文学性重視の作風が、わが国のミステリ界にはよく理解されなかった点にある。特にわが国における海外ミステリ紹介の先駆者であった江戸川乱歩が、トリック至上主義の人だったため、セイヤーズの美点をうまく理解できなかったことが大きい。

しかしセイヤーズの魅力は、ミステリ固有の物差しだけでは測りがたいところがある。確かに彼女の作品を本格ミステリとしてだけみると、お世辞にも出来が良いとはいいがたい。トリックは長編を支えるにはあまりにも小粒だし、真相の隠し方（ミステイクレクション）も稚拙、手がかりの整理も下手くそで、読者に推理する気をなくさせてしまう。これだけを見ればまるでダメで、天才クリスティーとは比べようもないのである。しかし人物造形の奥深さ、人間ドラマの魅力、情景描写の素晴らしさ、そして文体の格調高さでは、クリスティーを凌駕している。ミステリとしての満足感とは与えてくれなくても、文学的な感動は与えてくれるのだ。

これらの特徴は、主人公ピーター・ウィムジイ卿とその恋人ハリエット・ヴェインの恋愛ドラマに象徴的に表れている。セイヤーズの全長編で名探偵役を務めるピーター卿は、お金持ちの英国貴族で、教養豊かでスポーツ万能、働く必要もないので趣味で素人探偵をやっているといえ、いかにも鼻持ちならない嫌味な人物を想像させるが、実際は陽気でおしゃべり、お高くとまったところなどまったくない好人物である。おそらく高校生諸君が考える「もてる男」像とは若干ずれているのではないかと想像されるが、本当に中身のある「もてる男」とは、こういう人のことを指すのだと私は思う。だからピーター卿の魅力がわかるようなら、その人は充分に大人の女性だといえる。さてこのピーター卿が一目惚れしてしまうのが、ハリエット・ヴェインという女流推理作家である。二人は◎『毒を食らわば』(★933セ 東京創元社)という作品において最初の出会いをはたすが、なんとこの時ハリエットは殺人事件の被告として裁判にかけられて、絶体絶命の状態だったのだ。これをピーター卿が献身的な活躍をして見事救い出し、最後にハリエットに求婚するのである。普通のミステリならここで二人は結ばれてめでたしめでたしとなるところだが、セイヤーズはそんな底の浅い物語は書かない。ハリエットに求婚を断らせてしまうのだ。ハリエットも実のところピーター卿には魅力を感じているのだが、自分が一方的に助けてもらった立場では、素直に結婚を承諾するわけにはいかないと、プライドが邪魔をしてしまうのだ。このような自立し



た女性像はそれまでのミステリではお目にかかれるものではなかった。これこそがセイヤーズの文学性であり、彼女の小説の最大の魅力なのである。

振られてしまったピーター卿は、内心ショックを受けるが表面的には明るく振る舞い、機を見ては彼女に求愛を続けるのだ。しかし彼女は断り続ける。二人の恋ははたして成就するのか!? これがピーター卿シリーズの最大の読みどころである。二人の恋の行方が気になる人は、『毒を食らわば』から始めて、◎『死体をどうぞ』(★933 セ 東京創元社)、◎『学寮祭の夜』(★933 セ 東京創元社)、◎『忙しい蜜月旅行』(★933 セ 早川書房)と読み継いでいただきたい。中でも『学寮祭の夜』は、ハリエットが出身大学の学園祭に出席した時に巻き込まれてしまう匿名の手紙による中傷騒ぎをめぐる作品で、セイヤーズの文学性が遺憾なく発揮された傑作なので、お勧めである。

またこの2人以外にも、従僕のパンター、ロンドン警視庁のパーカー警部などのレギュラー陣も、皆奥行きのある魅力的なキャラクターなので、この点においてもセイヤーズの文学性を存分に味わってもらいたい。

◎『ナイン・テイラーズ』(1934年)(★933 セ 東京創元社)



【内容】年の瀬、ピーター卿は沼沢地方の雪深い小村に迷い込んだ。蔓延する流感に「転座鳴鐘」の人員を欠いた村の急場を救うため、久々に鐘綱を握った一夜。豊かな時間を胸に出立する折には、再訪することなど考えてもいなかった。だが春がめぐる頃、教区教会の墓地に見知らぬ死骸が埋葬されていたことを告げる便りが舞い込む…。堅牢無比な物語に探偵小説の醍醐味が横溢する、セイヤーズの傑作長編。

セイヤーズの最高傑作と評されているのが本作である。ただし残念なことにハリエットは登場しない。舞台はイギリスの片田舎フェンチャーチ村。たまたま車の故障でこの村に宿泊することになったピーター卿は、大晦日恒例の教会の鐘つき行事（これをナイン・テイラーズとよぶ）に参加させてもらうことで、すっかり村人たちとうち解け合う。そして後日、この村の墓場から身元不明の死体が発見されるという不可解な事件が起き、村人からの依頼でピーター卿は再び村に出向き、探偵調査に乗り出すのだ。

本作の素晴らしさは何と言っても、村の自然や伝統行事、そして素朴な村人たちの描写の圧倒的な美しさである。その豊かな叙情性には思わずため息が出るほどで、イギリスの田園の美しさとは何たるかを存分に堪能してもらいたい。そしてこの舞台ならではの殺人トリックも秀逸で、ミステリと文学が高いレベルで融合した正真正銘の名作なのである。

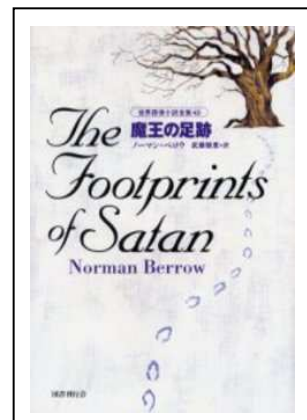
一方、本作で示した文学性の高さは、その後の作家たちに多大な影響を与えていくことになるのだが、それはやがてミステリ味よりも文学性を優先した作風が幅をきかせていく風潮につながってゆく。これはつまるところ本格ミステリの衰退ということであり、この点はセイヤーズ個人のせいではないとはいえ、彼女を恨みたくってしまう。

私の一押し!!

このコーナーは、各回のテーマに関して、一般的には特に評価が高い作品ではないものの中から、私が個人的にお勧めしたい作品を紹介する。

◎『魔王の足跡』(ノーマン・ベロウ)(1950年、オーストラリア) (★933 ペロ 国書刊行会)

【内容】ある雪の朝、英国の田舎町に謎の足跡が出現した。まっさらな新



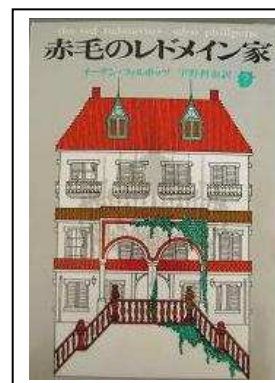
雪に覆われた道の中央に突如現れた蹄の足跡をたどる一行は、野原の真ん中に立つ1本の木へ行き着き、大枝からぶら下がった男の死体を発見する。蹄の足跡はそこでぶつりと途切れ、足跡の主はそこから虚空へ飛び立ったとしか思えない状況だった。しかも、問題の木には、昔魔女が縛り首になったという伝説があるという。怪奇趣味満点の不可能犯罪ミステリ。

これまで本稿では、本格ミステリの歴史に多大な影響を及ぼした作家を取り上げてきたが、本作の作者ペロウは、その意味ではほとんど影響力がなかった人だといえる。オーストラリアの不可能犯罪派としてよほどのマニアの間だけでその名を知られてきた人で、ようやく本邦初訳をみたのが2006年のこと。その本書もさほど評判にはならず、以後翻訳された作品は1点もない。まさに「忘れられた作家」、「知られざる作家」なのである。

本作の内容は怪奇趣味と不可能犯罪に充ち満ちており、「オーストラリアのカー」といった作風である。しかしだいたいにおいて「〇〇のカー」と称される人は数多くいても、その多くは期待はずれで、本家の足下にも及ばないことがほとんどだ。その原因は、不可能興味と怪奇趣味だけを真似ればカーができあがると安易に考えてしまっていて、カーの第一の美点である語り口の上手さをまったく理解していないためである。しかしこのペロウはその語り口がなかなか達者なのだ。いわゆる「足跡のない殺人」テーマに魔女伝説を絡めて展開する物語は、雰囲気満点で無類に面白い。読者の緊張感を切らすことなく、最後まで読み続けさせる筆力はたいしたものだ。そして結末で明かされる合理的な解決も納得の出来である。本稿の勧めにしたがってカーを気に入ってくれた人なら、充分に楽しめる作品だと思う。

それでは最後に、これまで紹介しきれなかった黄金期(1920-1949)の代表的な作品をさらに10冊選んで、そのキャッチコピーとともに挙げておこう。

1. ◎『赤毛のレドメイン家』(イーデン・フィルポッツ)
(1922年、イギリス) (★933 フ 東京創元社)
～絵のように美しい情景描写と冷徹な殺人計画、乱歩が絶賛～
2. ◎『赤い館の秘密』(A. A. ミルン)(1922年、イギリス)
(★933 ミ 東京創元社)
～『クマのプーさん』作者が書いた明るく楽しい素人探偵物～
3. ◎『矢の家』(A. E. W. メースン)(1924年、イギリス)
(★933 メ 東京創元社)
～犯人と探偵との火花を散らす心理闘争～
4. ◎『カリブ諸島の手がかり』(T. S. ストリブリング)
(1929年、アメリカ) (★933 ス 河出書房新社)
～中米カリブ海を舞台とした連作短編、最終話の衝撃は超ド級～
5. ◎『ある詩人への挽歌』(マイクル・イネス)
(1933年、イギリス) (★933 イ 社会思想社)
～スコットランドの古城を舞台とした文学的香気あふれる作品～
6. ◎『三人の名探偵のための事件』(レオ・ブルース)
(1936年、イギリス) (★933 ブル 新樹社)
～ピーター卿とポアロとブラウン神父が推理合戦する多重解決物～
7. ◎『野獣死すべし』(ニコラス・ブレイク)(1938年、イギリス)
(★933 ブ 早川書房)
～前半は倒叙物で後半は本格物、乱歩が絶賛～



8. ◎『帽子から飛び出した死』（クレイトン・ロースン）
 （1938 年、アメリカ）（★933 ロ 早川書房）
 ～奇術師探偵がオカルト的な密室殺人の謎を解く～
9. ◎『スイート・ホーム殺人事件』（クレイグ・ライス）
 （1944 年、アメリカ）（★933 ラ 早川書房）
 ～3 人の子ども探偵たちがママを助けて大奮闘～
10. ◎『ジェゼベルの死』（クリスチアナ・ブランド）（1948 年、イギリス）
 ～クリスティーを継ぐ新女王が書いた劇場殺人、衝撃のトリックが炸裂～



さて、これまで詳述してきた本格ミステリの黄金期は、第二次世界大戦の終結を機に急速に衰退に向かうことになる。それはミステリの性質が本格以外の他ジャンルに拡散していき、また本格ミステリ自身もその原型から大きく変質していったせいである。そのこと自体はミステリの健全な発展とも解釈できるのだから、一概に嘆くことではないのかもしれない。しかし私のように本格ミステリを深く愛するものには、純粋な本格ミステリが主流でなくなってしまった欧米の現状は、やはり寂しいものがある。

しかし本格ミステリの伝統がこの世から完全に消えてしまったわけではなかった。第2次世界大戦の終結を機に逆に本格ミステリの名作が次々と生み出され、今なお本格ミステリが大衆文学の中心的存在として輝き続けている国があるのだ。その国とは実は、わが日本のことなのだが、その日本における本格ミステリの発展はどのようになされていったのか。来年度本ホームページで公開予定の「**高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》**」で詳しく解説していきたいと思っている。乞うご期待！

【注】 1.◎『』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「」は、小説の題名です。

2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。

3.小説の内容については、書体を違えています。

《本格ミステリ入門（海外編）》参考文献

- 『世界の推理小説・総解説』中島河太郎・権田萬治監修（自由国民社）
『世界ミステリ作家事典 本格派篇』森英俊著（国書刊行会）
『推理小説の読み方』中島河太郎著（ポプラ社）
『東西ミステリーベスト100』文藝春秋編（★007 ブ 文藝春秋）
『東京創元社文庫解説総目録』高橋良平編・東京創元社編集部編（東京創元社）
『ハヤカワ・ミステリ総解説目録 1953 年-1993 年』早川書房編集部編（早川書房）
『クリスティーに脱帽ー海外ミステリ論集ー』江戸川乱歩著（河出書房新社）
『アガザ・クリスティ百科事典』数藤康雄編（早川書房）
『エラリー・クイーン P e r f e c t G u i d e』飯城勇三著（ぶんか社）
『奇蹟を解く男 ジョン・ディクスン・カー』ダグラス・G・グリーン著（国書刊行会）
『トリックものがたり』松田道弘著（筑摩書房）

2013.02.06 更新